氏　　名　風戸真理（かざと まり）
学位(専攻分野)　博　士（人間・環境学）
学位記番号　人博第344号
学位授与の日付　平成18年11月24日
学位授与の要件　学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻　人間・環境学研究科文化・地域環境学専攻
学位論文題目　モンゴル国牧畜地域における政治経済変化と遊動的牧畜
——社会主義から市場経済への移行のなかで——

論文調査委員　（主査）教授 菅原和孝　教授 田中雅一　教授 山田孝子
教授 太田　至　教授 稲村哲也

論文内容の要旨

本論文は，モンゴルにおける16年にわたるフィールドワークに基づいて，以下の3点を明らかにすることを目的とする。第一に，現在のモンゴルで遊動的牧畜がどのように営まれているのかを牧民の生活史と実践に即して解明することである。第二に，牧民自身は家畜をどのような存在として認識し，その認識に基づいていかなる生業戦略を組織しているのかを，国家の政治経済体制の変化，および自然条件の長期的な変動と関連づけて，明らかにすることである。第三に，社会主義的な牧畜集団化政策とその解体過程を再構成し，モンゴル牧民が社会主義をどのように経験し，ポスト社会主義状況にいかに対処してきたかを検証することである。

論文は，序章と終章を合わせて計9章で構成される。序章では，本研究の理論的な位置づけを明らかにする。第1章では，モンゴルにおける牧畜政策の変遷を概括し，主要調査地の概況を示す。第2章では，牧民の居住地選択と牧畜の年間サイクルを概説する。第3章では，流動的な社会関係に基づいた群れ管理技術と労働の組織化を解明する。第4章では，社会主義体制下の農牧業協同組合（ネグデル）が民営化され資産が分配された過程を再構成する。第5章では，分配された牧畜資本のなかでもとくに重要な価値をもつ冬営地（ウブルジュー）をめぐる権利の特質を明らかにする。第6章では，政治体制と自然環境の変動のなかで，家畜の個体性がどのように認識されてきたかを分析する。第7章では，変動する社会経済条件下での世帯の発展と離合のプロセスを跡づける。終章では，以上の分析を踏まえ，社会主義およびポスト社会主義への移行を経験したモンゴル牧畜社会の特質を照射する。

序章では，本研究の背景となる先行研究を，ⅰ）牧畜に関する人類学的研究，ⅱ）モンゴル牧畜社会に関する研究，ⅲ）ポスト社会主義への移行期にある社会の研究，の3つの問題系に大別したうえで，現代社会において牧畜技術や群れ管理の実態を明らかにするためには，それを規定する国家体制との関わりや市場経済化を視野に入れることが必須であるという研究指針を提示する。

第1章では，モンゴル牧畜社会のおかれている自然環境の特性と20世紀以降の牧畜政策の変遷を概括する。本研究のフィールドは，Ⅰ：アルハンガイ県（森林性草原），Ⅱ：ドンドコビ県（砂漠性草原），Ⅲ：ドルノト県（草原），Ⅳ：ザブハン県（森林性草原）の4地域である。第2章と第3章はおもに調査地Ⅰ，第4章は調査地Ⅲ，第5章は調査地Ⅳ，第2章の一部，第6章，第7章は，調査地Ⅱで得られた資料に基づいている。

第2章では，歴史的な変化と牧畜の年間サイクルという二つの側面から，牧民の生活様式の概略を描き出す。ネグデル期には牧民は家畜管理労働に従事することを軸にしつつも，家族の発展サイクルに応じて，放牧地と定住区の両方で多様な職務についてきたことが明らかにされる。また，4つの季節区分に応じて中心的な生産課題を追求する，自然環境に適応した牧畜の年間サイクルが成立していることが指摘される。

第3章では，ヒツジ・ヤギ放牧群の輪郭の曖昧さが分析の主題になる。牧民の居住集団が多様な社会的要因によって離合

集散的に編成されることに応じて，放牧群の編成も流動的になる。こうした人＝家畜関係は，ネグデル期から積み重ねられてきた放牧理念と実践を基盤にしていると論じられる。

第4章では，ネグデル民営化の制度的な全体像を示す。国有財産の私有化におけるバウチャー制の採用，権力や情報網を巧みに利用した財産取得といった過程を分析するところから，激動期をくぐりぬけた民衆の知識，実行力，政治力の多様性を検証する。

第5章では，適切な冬営地を確保することがモンゴル牧畜の生命線であることを強調したうえで，民営化に伴う土地の私有化政策が冬営地に対する占有権の固定化をねらったのに対して，牧民自身は法的権利に固執することなく，従来の利用慣行に基づく権利を優先させてきたことを明らかにする。

第6章では，家畜の個体性に対する牧民の認識を手がかりにして，国家体制の変化が牧畜社会に与えた影響を論じる。社会主義下の牧畜が分業と生産性向上を至上命令としていたのに対し，市場経済化後には，すべての家畜が私有化され，各世帯による自律的な経営のための資本となった。家畜を商品として匿名化するという一貫した圧力を受けながら，一部の家畜と人間とのあいだに特異な関係が成立してきたことを明らかにする。

第7章では，一世帯に焦点をあて，その発展と離合の過程を現在に到るまで追跡することにより，グローバル化を生きる遊牧民の生活スタイルを特徴づける。社会主義体制下でも牧畜と他の生計手段とを臨機応変に組みあわせてきた牧民たちは，市場経済化の後にも，状況依存的に居住地と生計手段を選択していることが照らしだされる。

終章では，序章で区別された3つの問題系ごとに，本研究の分析結果が論じなおされる。最後に，以上の考察に基づいて，ポスト社会主義状況におけるモンゴルの牧畜文化は，十数年前までは確固たる現実であった社会主義的な生産様式と社会関係に規定されながらも，モンゴルに固有な土地＝家畜＝人関係を基盤として重層的に構築されていると結論づけられる。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は，牧畜に関わる人類学的研究の豊かな蓄積に立脚しながら，内陸アジアの広大な牧畜地域の中心であるモンゴルにフィールドを定め，遊動的牧畜という生業様式の全体像を，放牧群の管理，居住集団の編成，牧民の生活史，土地利用，人＝家畜関係といった側面から多角的に解明した点で，高い学術的な価値をもっている。それと同時に，社会主義からポスト社会主義への歴史的な変化をくぐりぬけた牧民の実践をきめ細かく記述し，現代モンゴルにおける遊動的牧畜が，政治経済的な変動の影響を蒙りながら重層的に構築されていることを論証したところに，高い独創性が認められる。

本論文において評価すべき学術的価値は，以下の四点に要約できる。

本論文の第一の意義は，モンゴル牧民の家畜管理と人＝家畜関係の特徴を精密に解明したばかりか，その特徴の多くが，国家体制の変化と深く関わって成立したことを明らかにしたことである。従来アフリカを中心に展開されてきた牧畜に関する生態人類学的な研究においては，日帰り放牧における家畜群の安定性と牧童の介入行動の少なさが強調されてきた。だが，モンゴル牧民は，採食地条件の最適性とは必ずしも結びつかない多様な社会的要因によって季節移動を組織し，共同放牧による労働の省力化を実現している。牧民の居住集団が離合集散的に編成されることに応じて，放牧群の編成も流動的になる。牧民がこうした寄せ集め的な群れを「頼りない存在」として認識していることが，大量の介入行動を促している。こうした人＝家畜関係は，ネグデル期において，種・性・成熟度によって細分化された均質な群れの管理を任せられることを通じて積み重ねられてきた放牧理念と実践を基盤にしていると考えられる。その一方で，社会主義体制下においても，市場経済への移行期においても，家畜に対する意味づけと価値づけは，匿名化と商品化に覆いつくされたわけではなく，自家消費・贈与・家族の記憶を保持する媒体といった，重層的な役割を担っていたことがわかった。これらの論証は，牧畜の人類学的研究に新しい視角を切り拓くものとして高く評価できる。

本論文の第二の意義は，牧民の生活史を詳細に分析することによって，ネグデル期以前・ネグデル期・市場経済への移行期を通して，臨機応変な居住地選択と世帯間の協力に基づいた牧畜経験の積み重ねが持続してきたことを明らかにした点である。ポスト社会主義状況下のモンゴル牧畜社会研究においては，牧畜世帯の経営の小規模性や新規参入者の技術不足を憂慮する論調が支配的であった。本論文は，こうした研究動向を批判しつつ，遊牧社会の文化的特質に立脚しながら，牧民の生活実態に関する理解を深めることに成功している。この点は，モンゴル牧畜社会研究に対する大きな寄与として高く評価

できる。

本論文の第三の意義は，ネグデル民営化のプロセスを綿密な聞き取りと文書渉猟によって再構成することによって，近年とみに注目されているポスト社会主義社会の研究に，新しい寄与を果たしたことである。とくに，国有財産と協同組合財産の私有化のために導入されたバウチャー制への対処，あるいは従来の権力を巧みに利用した資産確保といった事例のなかに織りなされている多様な実践を解きほぐすことによって，本論文が民族誌記述の新しい方向を探っていることは高く評価できる。

本論文の第四の意義は，民営化に伴う土地私有化政策にとって最大の争点となった冬営地（ウブルジュー）に注目し，この資源の特異な価値とそれをめぐる権利の性質とを鮮明に照らしだしたことである。共有資源としての草地利用をめぐっては，従来，その資源としての不安定性と市場経済化に伴う過放牧が議論の的になってきた。これに対して，本論文は，自然資源としての草や水だけを問題にすることの不備を衝き，数世代にわたる牧畜実践によって堆積し更新された家畜の糞が保温性のあるマット（ボーツ）を形成していることにこそ，冬営地の資源的な価値の中核があることを明らかにした。さらに，このような資源の利用には共同的な社会関係に埋めこまれた権利が結合し？いるがゆえに，土地の私有化に際しても登記の対象にはならなかったことに注目し，それが資本主義的な私的所有概念をあてはめることのできない「歴史的ストック」だと論じる。この論証は本論文の白眉であり，従来「共有地の悲劇」と総称されてきた共有資源をめぐる人類学の議論に斬新な視角をつけ加えるものとして高く評価できる。

今後，さらなる探究が期待される点は以下の三点である。第一に，異なった三つの気候帯を調査地として選んだことの利点を生かすためには，すべての調査地で日帰り放牧を同等の方法で観察することによって，放牧を規定する生態学的要因を解明することが有効であろう。第二に，社会主義から市場経済への移行期におけるローカルな実践を方向づけるモンゴル的特色を明らかにするためには，旧ソヴィエト連邦との比較を体系的に行なうことが期待される。第三に，東欧諸国などモンゴル以外の国々にも視野を広げ，また，日常の言語活動をより緻密に分析することによって，ポスト社会主義社会の民族誌的研究をいっそう発展させることが期待される。

本学位申請論文は，地域の環境に適応した人間の文化・生業・社会組織の様態を解明することを目的の一つとしている文化・地域環境学専攻にふさわしい内容を備え，今後の発展も大いに期待される優秀な研究成果といえる。

よって本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また，平成18年５月25日，論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果，合格と認めた。